

待ち焦がれた
ハッピーエンド

Miku & Dieter

吉桜美貴

Miki Yozbizakura

termity



エタニティ文庫

目次

待ち焦がれたハッピーエンド

5

書き下ろし番外編
待ち焦がれたハネムーン

343

待ち焦がれたハッピーエンド

序章

「女優志望？」

「なにか問題でも？」

成瀬美紅は精一杯の愛想笑いをした。

さすがに秘書面接で女優志望はまじかっただ？」

「いや、問題ない。むしろ都合だ」

重厚なブレジデントデスクについた紳士は、美紅の履歴書を見ながら質問を続ける。

「二十二歳、現在無職か。秘書の業務経験は？」

「三年です。スケジュール管理や文書作成といった基本的なことはマスターしています」

「十歳のとき母親がアメリカ人と再婚。それで渡米してきたと」

いかにも高級そうなダークスーツに身を包んだ紳士は、黒い革張りの椅子にもたれ、長い指で履歴書をめくった。紳士のブロンズ色の髪は櫛で丁寧に梳かされ艶めいており、

鼻梁はギリシャ彫刻のように高い。エキゾチックな美形だが、日本人に見えなくもない。その声は低く、事務的で、感情らしきものは読み取れない。

彼の質問は淡々と続く。

「女優を目指したきっかけは？」

「はい。初めてブロードウェイミュージカルを観たとき、すっごいドキドキワクワクしたんです。本当に夢のようで、素晴らしくて」

美紅は当時の感動を思い出し、目を輝かせた。思わず声が大きくなってしまった。

「私にはもうこれしかないって思ったんです。どんな方法を使っても、この舞台に立つてみせるって！」

「それでニューヨークに？」

なんの感動も示さないまま、紳士は言った。長い睫毛に囲まれたグレーの瞳は、無機質で冷たい。

それでも美紅は怯まず元氣よく質問に答える。

「はい！ パートタイムで働きながらアクターズスクールの講座を受けています」

「特技は、ショーギシアツ……？」

「将棋と指圧です。日本で習いました」

「ふむ。家族は？」

「実父は私が七歳のときに、母は三年前に亡くなりました。二歳年上の姉がいますが、日本の祖母のところで暮らしています」

「再婚したお父さんは？」

「アメリカに移住してすぐ離婚したので、今はどこでなにをしてるか。継父とは、もともとそんなに仲良くなかったですし」

「……なるほどね」

紳士は涼しげな目をすつとこちらに向けた。

そのクールな視線に美紅はドキリとする。

うわっ……。すごっ。雑誌で見るより断然イケメン。しかも超セクシー！

眼前の美麗な紳士は、日系ドイツ人のデザイナー・アウグスト・キタヤマ、二十八歳。ソフトウェア会社のCEO——最高経営責任者でIT業界の革命児と呼ばれている。父親は世界的自動車メーカー・キタヤマグループの創業者だ。デザイナーは十代で起業したこの会社を、切れ過ぎる頭脳と強引な買収で世界規模に拡大させた。利益のためには手段を選ばない、冷酷非道な野心家として知られている。ゴシップ誌によると女優やセレブと浮き名を流すも、特定の恋人は作らない独身プレイボーイらしい。

「国籍は？ パスポートは持つてるね？」

言いながらデザイナーは氷のような視線を履歴書に戻した。

美紅は改めてデザイナーを観察した。抜群に洗練された、他を圧するオーラ。精神と肉体が成熟した男だけがまとう静謐な色気。これは只者じゃないぞ、と美紅は評する。

いっぽう、本日の美紅は完全に面接仕様だ。栗色のロングヘアをひつつめ、丸めてお団子にしている。髪の毛が多いせいか大きな玉ねぎが脳天に載っているみたいに見える。親友のステファニーから借りたブカブカのねずみ色スーツを着込み、近眼のため大きな眼鏡を掛けている。肌は白く、ぱっちり二重の瞳は琥珀色だ。日本人にしては色素が薄いほうだろう。そばかすの散った鼻の下にある、厚めの唇が色つばいと褒めてくれる人もいるが、美紅自身は気に入っていない。

ここはニューヨークのウォール街にあるIT会社『グレイルソフト』のオフィスビル最上階。秘書の求人に応募した美紅は最終面接を受けている真つ最中だ。プレジデントデスクの正面に置かれたスツールに美紅は腰掛けている。デザイナーの背後は全面ガラス張り、眼前にマンハッタンの迫力ある摩天楼が広がっている。

この部屋の内装は一流企業の役員室にふさわしくシックだ。デスクやソファは流線型、照明とコーヒーターブルは惑星や宇宙船を模した形で、まさにニューヨーク最先端のデザインという感じ。壁には大きく引き伸ばされた深海の写真が飾られている。

もしかして海が好きなのかしら？ と美紅は想像する。

「ミス成瀬？ 国籍とパスポートは？」

「はっ！ すみませんっ！」

美紅は我に返った。やばいやばい。面接中だった！ ボーっとしている場合じゃない。

「国籍はアメリカです。パスポートの有効期限はあと五年ぐらいあります」

「独身か？」

「はい」

「恋人は？」

「……失礼？」

まさかビジネスの場でプライベートな質問をされると思わなかった美紅は聞き返す。

「恋人はいるのかと聞いているんだ」

「プライベートに関して答える必要はないと思いますが？」

「必要があるから聞いているんだ、ミス成瀬」

ディーターは答えを促すように大きな手を美紅のほうへ差し出した。上流階級の紳士らしく、手入れが行き届いておりつるりとしている。ディーターは苛立ったように声を大きくした。

「時間が惜しい。答えてくれないか」

「いません、が」

「好きな人は？」

「いません！」

「身長は？」

「一六〇センチです」

「スリーサイズは？」

「は？」

「ミス成瀬。何度も同じことを言わせないでくれ」

ディーターは指先でデスクをトントン叩く。しかも早く答えると美紅を睨んでいる。

美紅は唾然とした。なんなの？ セクハラ？ 面接でスリーサイズを聞くとか有り得ないんですけど。

「質問に答えたまえ」

ディーターは眉一つ動かさず、冷淡に命令した。答えないなら、とつとと帰れと言わんばかりだ。

美紅はなかばヤケクソでスリーサイズを申告し、嫌味をつけ加えた。

「スリーサイズで合否を決めるなんて素晴らしい会社ですね」

「合否には関係ない。準備に必要な情報だから聞いたままで」

「準備ですって？」

「今、質問しているのは僕だ。まずは僕の質問にすべて答えてくれないか」

ディーターはあくまで冷徹だ。失礼な質問の連続に、美紅はだんだん不満が募ってくる。

「君はコンピュータソフトの研究開発の経験はあるか？」

「いいえ。ひとつつも」

「では、興味は？」

「ぜんぜん興味ありません。これっぽっちも！」

美紅はつい声を荒らげてしまう。ディーターは少し呆気にとられながら美紅を見た。

美紅は威嚇して睨み返す。

「最後に。ミス成瀬、君はすべての質問に正直に答えただろうか？」

「ええ、もちろんです。ミスターキタヤマ」

美紅は鼻息荒く返事をする。なんだか無性に腹が立ってきた。

「……いいだろう。君は合格だ」

「は？」

いったい今のやりとりのどこがお眼鏡にかなったの？

「仕事内容はアロン・スミスから聞いてるね？」

アロン・スミスとはディーターの秘書のことだ。一次面接の面接官はアロンだった。ディーターと同年代の美形な男。彼が推してくれたおかげで、この最終面接まで辿

り着いた。

「はい、少しだけ。なにか特殊な任務があると聞きました」

「実は秘書というのは名目上のものでね。実際の任務は別にあるんだ」

「名目上？」

「結論から言おう。君には期間限定で僕のフィアンセになってもらう」

「へ？」

「エーゲ海の島で二週間、僕の一族に会ってフィアンセ役を演じて欲しい」

なにになになに？　なんだって？　今、なんて言った？　展開についていけず、美紅はポカンと口を開けた。

そんな美紅には構わず、ディーターはビジネスライクに説明を続けていく。

「と言っても、別に特別なことをしてほしいわけじゃない。君は自由に休暇を楽しんでくれればいい。必要なものはこちらですべて用意する。それから、なんでも好きなものを買ってくれて構わない。もちろん、すべての費用は僕が持つ」

ディーターは顔色一つ変えずそう言った。

美紅は馬鹿みたいに口を開けたまま、ディーターの唇を見つめた。

「実は従妹のアレクシアと結婚させられそうになっている」

ディーターは芝居がかった様子で悲愴な表情を作ると、ピアニストのように長く繊細

そんな指を組んだ。

「アレクシアの父親がヨーロッパの小国の王族でね。ちよつとした利権がらみだ。従妹とは子供の頃からのつき合いで妹みたいなものだし、彼女には愛する恋人がいる。それに僕は誰とも家庭を持つ気はない。だが、両家の両親はもちろんのこと一族全員が僕たちを結婚させようと画策している。そこで僕がフィアンセを紹介すれば彼らも諦めるだろうという計画だ。フィアンセを演じるだけで君の経歴に傷はつけない。安心してくれ」

「ちよつちよつちよつと、ちよつと待ったあああー！」

美紅は腕をまっすぐ伸ばし、手のひらを広げてSTOPと叫ぶ。

「なに勝手に話を進めてんですか？ 私、このお仕事を引き受けるなんて、ひとつことも言っていないんですけど？」

「報酬は最初に提示した額の十倍払う」

ディーターは切れ長の目を細め、すつと人差し指を一本立てた。微かに口角を上げ、さらりと報酬を上げてくる。

「それに加えて、ミッシェンクリア後にさらに同額。ついでに、君が住まいを探していると聞いてマンションも買い上げた。契約終了時までに住めるよう準備を整えておく」
「なんですって？ 報酬二十倍な上、さらにマンションまで！」

美紅の目は一瞬でドルマークになる。実は今、美紅は人生のどん底にいる。勤めていた会社を解雇され職もない。家賃滞納で家も失う寸前。恋人もいない。そんな明日をも知れぬ身だ。女優になる夢はあるけど、夢だけじゃ生きていけない。この面接に落ちたらホームレス支援センター行き。

正直、この報酬は破格だ。

ディーターは値踏みするようにこちらを見ている。指先から髪の毛一本一本まで、視線がじわじわ這ってゆく。まるで裸にされているよう、と美紅は思う。

「女優になりたいなら、レッスン料や衣装代など、いろいろ物入りだろうね。これはあくまで契約だ。たった二週間、形ばかりの婚約をするだけで僕は面倒な政略結婚を免れる。君は住まいと小切手を手に入れる。すべてが終われば元通り。悪い条件じゃないと思うが？」

確かに悪い話じゃなさそうだ。美紅は懸命に頭を働かせる。婚約者を演じるのは、演技の勉強にもなるわよね？ 現金は喉から手が出るほど欲しい。でも……

「なぜ私なんですか？ ふさわしい人が他にいっぱいいるんじゃない？」

「女性に不自由はしていないが、適任者は君しかいないんだよ。あくまでビジネスライクに契約を履行し、後腐れなく関係を終わらせることが肝要だ。勘違いして期待されても困るし、どこかのあばずれを雇って脅迫まがいのことをされても面倒なんでね」

なるほど。あなたと寝た女は、皆、あなたに結婚を迫るというわけね。で、あなたはその気がないと。

「要は、愛人になれってことなんですか？」

「勘違いしないでくれ。僕が買うのはあくまで君の時間であって、体じゃない。セックスは一切なし。君のタスクは二週間着飾って僕の隣でニコニコしていることだ。後でアーロンと契約書類を確認してくれ。そう明記しておいた」

「報酬は必ず頂けるんですね？」

「無論だ。額が不足なら言ってくれ。君の働きによつては特別ボーナスも出そう。それから今日、契約書類と一緒に前金を支払う」

「……わかりました。この話、お受けします」

美紅は札束の前にひれ伏した。それはもうパーフェクトで完膚なきまでに深々と頭を垂れた。嗚呼、札束様。

——これも生活のためよ。かなり怪しい契約だけど、背に腹はかえられない。ご飯を食べて眠らなきゃ生きていけないんだから。よくよく考えたらこんな上流階級のイケメンが、私みたいな貧乏小娘をどうこうするわけないし。となれば、これはかなり美味しい。美味すぎる!! 報酬を全部もらえば向こう十年はトレーニングに集中できる。それに、今とくに力を入れているダンスレッスンだって受け放題だ。夢みたいい♪

「結構。では、よろしく。ミス成瀬」

ディーターは立ち上がり、こちらへ歩いてきて手を差し出した。身長は一八〇センチ以上あるだろうか。がっしりした広い肩幅に頑強な体。かなり本格的に鍛えてそう。

美紅も握手に応えるべく、すつくと立ち上がる。そしてディーターを見上げ、営業スマイルで手を差し出した。

「こちらこそ、よろしくお願いします。ミスターキタヤマ」

ディーターの手を握った瞬間、指先から全身にピリッと刺激が走った。

あつ……なに、これ。

ディーターの手は冷たく滑らかだった。手を離すのが名残惜しいくらい。微かに美紅の体は疼いた。

ディーターも少し驚いたように自分の右手を見ている。

もっとあの手に触れて欲しい……

そう思いながら美紅が見ていると、ディーターはふいと横を向いた。美紅はハッと我に返る。

やばっ。なに考えてるの？ やばすぎ。欲求不満すぎ。ここはオフィスだって！

「どうした？」

「いえ、なんでもありません」

美紅は慌てて汗ばんだ手のひらをジャケットの裾で拭った。——ちよつと私、なんか変かも。もつと触れて欲しいと思うなんて。

「出発は一か月後だ。これから向こう半年間は僕以外の男との関係は控えてくれ。申し訳ないがこれも契約の一つだ。僕も君以外の女性との関係は一切断つ。お互いクリーンな状態で計画を進めたい」

「了解しました。ミスターキタヤマ」

「フィアンセはファーストネームで呼び合うのが普通だ。僕のことはデーターと呼んでくれ」

データーは自らの顎に手を当て、ゾツとする目をした。

「契約違反には重大なペナルティを科す。もし僕に嘘を吐いたり、裏切ったりしたらどうなるか、わかるね？」

社会から追放され、地獄の果てまで追い回され、骨の髄までしゃぶられるんですね。まさに蛇に睨まれた蛙とはこのことだ。データーがちらりと視線を動かしたただけで、空気が凍結する。

「わかっているつもりです」

言いながら美紅は、少しずつ不安になってきた。私がこんなにすごい人の婚約者役？本当に？

「私で大丈夫かしら。フィアンセを演じるって、他にどんなことをすればいいんでしょう？」

「細かい内容はアロンに確認してくれ。契約書類にもやるべきことがすべて書いてある。君はそれに従って行動するだけでいい。心配ない。僕とアロンが全力でサポートする」

「ご期待に添えるよう努力します。データー」

「最後に一つ重要なルールを言っておく」

「なんででしょう？」

データーは少しまぶたを伏せ、怖いほど冷たくこう言った。

「絶対、僕を好きになるな」

第一章 まさか私が契約婚約!?

「絶対、僕を好きになるな」

美紅は半眼になりながら、データーの声を真似して言った。

「ですって！信じられる？ どんだけ上から目線なの!？」

自室のベッドに座った美紅はクッションを力任せに投げた。それは壁に貼られたミュージカルのポスターに当たって落ちる。

「信じられないところは、もっと他にあるでしょ」

ステファニーはフォークでトマト味のヌードルをつつきながら、笑ってツッコむ。

「秘書面接からの偽装婚約にリゾート、さらに好きなもの買い放題……ロマンズ小説のテンプレを全部ぶっ込んだみたいだな展開ね」

ステファニーは仕事帰りにファストフードを買ってきては、美紅の家で食べるのが常だ。ちぢれウェーブのかかったポリウムある赤毛を束ね、赤いフレームのメガネをかけている。男物のよれよれシャツに擦り切れたダメージジーンズという姿は、さながらストリートアーティストといった出で立ちだ。実際は不動産会社の事務をやっている。美紅とはハイスクール時代の同級生だ。卒業して一旦離ればなれになったが、マンハッタンでばったり再会した。以来、ステファニーの職場から近いという理由で週に三日はこの部屋に入り浸っている。

「こんだけテンプレが広く知られてたら一回ぐらい現実に起こってもおかしくないでしょ」

と美紅は言う。

今日の美紅は髪を下ろし、メイクもしていない。デカデカとロゴの入った白いパー

カーを着て、下はスウェットのズボンを穿いている。そうしてひさしぶりにやってきたステファニーに先週の面接の顛末を報告していたのである。

「ま、そうよね。これは現実だもんね」

ステファニーは眼鏡のフレームをぐいっと押し上げ、感心したように言葉が続ける。

「それにしても、僕を好きになるな……ってすごい台詞ね。その一言が森羅万象を表現してるわ。一周回って笑えてくる。ただしイケメンに限る、みたいな」

「けっ。イケメンだからだよ。何様だっつーの」

「事実じゃん。かたや、モテモテイケメンスーパーエリート大富豪。かたや、職なし彼なしの冴えない貧乏女優。上下で言えば、あなたが下でしょうが」

そこまではつきり言われたら言い返せないんですけど、と美紅は恨みがましくステファニーを睨んだ。

「けどさ、あんたは秘書の採用に応募したんでしょ？ 実は偽装婚約の片棒を担ぐ仕事でしたって詐欺みたいな話ね」

「そう言うステファニーはヌードルを一気に嚙り上げ、スープと一緒に吞み込んだ。

「報酬が破格なのよ！ 私も最初はその場を去ろうと思ったけどさ、金額が私の年収を余裕で超えてたわけ」

「ふーん。それで動けなかったんだ。金に釣られて？」

「そうよ。だって金が必要なんだもん」

ここはダウンタウンにある美紅の狭いフラット。ダウンタウンと言えば聞こえはいいが、その実チャイナタウンの外れにある低所得者用の集合住宅だ。美紅の部屋は1Kでたった六畳しかなく、シングルベッドと小さなチェスト、さらにデスクを置いたらもう足の踏み場がない。部屋は「日本式」を採用し、入室の際は靴を脱ぐことにしている。

ステファニーは靴を脱ぐたびに「めんどくさいな」とブツブツ文句を言う。それでも裸足で過ごすのはお気に入りに入らしく、ベッドとデスクの間に長い足を折って座り込んでいる。築三十年以上経つ建物は老朽化が進み、あちこちタイルは剥がれ、換気扇にはカビが生え、排水は最悪だ。しかも月末までに家賃を払わなければ出ていかざるをえない。「嘘だね。金だけじゃないでしょ。気に入ったんでしょ？ その男のこと。もしかして惚れちゃった？」

ステファニーは目をゼリービーンズみたいな形にしてニヤニヤした。

「バツ……馬鹿言わないですよっ！ お金よお金。それ以外なものもない。雇い主相手に恋愛とか、絶対ないない」

「あーら。男女が恋に落ちるのに理由はいらないって。運命のお相手なんてひと目見りゃわかるんだから」

ステファニーは自信たっぷりに言う。そうして美紅の目をじっと覗き込むと、さらにこう言い聞かせた。

「けど、相手を選びなね。あんたが傷ついてる姿を見たくないし」

「やっぱ断ったほうがいいかな？ この仕事」

「あたしやオイシイ仕事だと思うけど？ あんた、貯金が一ドルもないんでしょ？ 後がないんでしょ？」

「ないわよ。だから引き受けたんだもの。こうなりゃ婚約者でもママでもスーパーヒーローでも演じてやるわ」

「その意気よ！ しかも成功報酬でマンシオンつきでしょ？ 乗らない手はない！ この狭いフラットで晩御飯食べんの、いい加減うんざりなんだから」

「私だって、ステフが座るだけで足の踏み場もなくなるフラットはもう勘弁。ピシッとミッシェンクリアして、広いお部屋に住むんだから」

「いーい？ 美紅。ここはマンハッタンなの。アメリカンドリームのメッカなのよ？ こんなチャンス二度とないよ！」

「そう言うと思ったわ、ステフ。よーし、いっちゃおう気合い入れて頑張るか！」

「けどさ、その雇い主ってかなりいい男なんでしょ？」

「言いながらステファニーはキャンパス地のバッグから雑誌を取り出してみせた。

『Celeb☆Star』と奇抜なロゴが入ったニューヨーカー御用達のゴシップ誌だ。最速で

スクープをものにすることで有名である。
 「ほらほら見てよ。今週号。あなたの雇い主が載ったから買ってきちゃった」
 よく見ると、有名女優の腰に腕を回したディーターの姿が表紙を飾っていた。相変わらず感情の薄いクールな顔。エレガントなディナージャケットを着て、気取った様子でエスコートしている。

写真じゃ全然伝わってこないわね、あの超強烈なオーラが。周囲を圧倒する存在感が。実物のほうが、もっとずっとすごいんだから。

「美紅、あんたデレデレしてるよ」

ステファニーが肘で美紅の脇腹をついた。

「ちよつと、やめてよ。そりゃあ確かに頭がよくて金も持つてるかもしれないけどさ。背も高くて顔も整っててイイ体してるけどさ。声も甘くて唇もセクシーで、目ヂカラがはんばないって言うか」

「ほーほーほー」

ステファニーは、したり顔でニヤニヤする。ディーターのグラビアをうっとり眺めていた美紅は、はっと我に返った。
 「とにかく性格が最悪なんだって！ 傲慢で自信家で上から目線。私なんて完全に見下されてるもん」

「またまたあ！ そいつのこと意識してんのがバレバレですよ？」

「別に。単に契約したっただけよ。面接の日以来、会ってないし」

ディーターに会ったのはあの面接が最初で最後だ。あれ以来、すべて秘書のアーロン経由でやり取りしている。VIPには、そうそう簡単に会えないらしい。

「そうなんだ。エーゲ海に行くまでフィアンセ殿に一度も会わないの？」

「ううん。一回会う予定。明後日の夜に打ち合わせを兼ねてディナーに行くの」

「ディナー？ どこどこ？」

「知らない。イースト・ビレッジにあるカジュアルなお店って言うってだけ……」

「しかし、あなたに務まんのかね？ あんなゴージャスな男のフィアンセ役なんてさ」

「それは大丈夫。ディーターの第一秘書のアーロンって人が全部サポートしてくれるから」

「あ！ さっき玄関で会った優男か！ とびきりハイスベックじゃん。プロンドの長髪で、いかにもプレイボーイって感じ」

「確かに格好いいけど誠実な人よ。ディーターとは正反対のタイプ。ディーターが陰ながらアーロンは陽で、ディーターが剛ならアーロンは柔みたいよ」

「へー。あんなセクシーな男と四六時中一緒にいられるなんて羨ましいわ」

「四六時中っつーか、朝九時に迎えに来られて、プティック回って服買いまくって、遅

くまであちこちのサロンに連れ回されるだけよ」

美紅は思い出してうんざりした。面接の翌日はエステサロンに強制連行。ヘッドスパにフェイシャルケアにボディケア。全身脱毛してマツサージ。おかげで肌は生まれたての赤ん坊みたいになるつるだ。それから眼鏡もコンタクトに変えさせられ、ヘアサロンにネイルサロンにメイクスタジオと引つ張り回された。体中いじくられ、ほうほうのいで帰宅。これが毎日出国の日まで続く。

「これぞロマンスの王道。『マイ・フェア・レディ』ね。ただし、主演女優は売れない冴えない貧乏小娘だけど」

三度の飯よりロマンス小説を愛するステファニーは夢見るように言った。学生の頃からロマンス小説ばかり読み、ロマンス小説家を目指して暇さえあれば原稿を書いている。そんなステファニーを美紅は「ロマンス脳」と呼んでいた。

「貧乏小娘とは失礼な」

美紅はブツブツ言った。

「さっきのは冗談として、あんた綺麗になったよ。その髪型、似合ってる。あのひつつめオニオンヘアより断然いいわ」

ステファニーは美紅の緩い巻き髪を褒めた。長年手入れもせずにボサボサだった髪が、今やしっとり艶やかになっている。

「これね、ミッドタウンにあるヘアサロンのトップスタイリストにやってもらったの」
「報酬は破格。タダでサロン行きまくり。毎日、金髪美青年にハイヤーで送迎されて、至れりつくせりじゃん」

「ほんとだね。後がないから気合い入れてやるわ。それに、楽しいこともあるし。今日なんて五番街のブティックに行ったの！」

「わお！ 五番街！ うちらには一生縁がない場所ね。並んでるお店は、一流どころばっかりじゃん！」

「そうなの！ そしたらね、なんとブティックが貸し切りで私専用のビューティーアドバイザーまでいたのよ！ すごいでしょ？」

「出た！ 貸し切り。さすがIT業界の帝王は、やる事が違うわ」

「もう袖を通すのも勿体ないドレスを山ほど買ったの！ いつもの古着屋で買うワンピースと桁が違ったわよ！ 全部デザイナー持ちで。ステフにも見せたかったなあ」

「いいなあ。あたしも見たかったわ。夢があるう。あんた、ダンスやっててめっちゃスタイルいいから似合うと思うわ」

「面接のときにスリーサイズ聞かれてさ、そんなときはハアアア？ って思ったんだけど、このためだったのよね」

「ただのセクハラじゃなかったわけだ」

「そうなの。しかもビューティーアドバイザーってすごいもの。髪とか瞳の色を見て、あつという間に似合うドレスをチョイスしてくれるんだもん」
 「けどさーあんだ、フィアンセを演じるってどこまでやるの？ まさか夜のお勤めもあるの？」

「大丈夫大丈夫！ そこはキツチリ確認したから」
 美紅は言いながらバッグから封筒ふうとうを取り出す。契約書を抜き出すとペラペラめくり、該当箇所を指差してみた。

「ほら、ここ。セックスはしないって、ちゃんと書いてあんの」

「とかなんとか言っちゃってえ！ リゾートへフィアンセとして行くんでしょ？」

ステファニーは美紅の肩に腕を回して言う。

「これはビッグチャンスよ！ 美紅！」

「チャンスって？ な、なにが？」

ステファニーは美紅の耳元に口を寄せて、こうささやいた。

「ロ・ス・ト・バー・ジン」

美紅は、ぼつたりとクツションの上に倒れ込んだ。

「いいじゃない、いいじゃない！ プレイボーイの誉れほまれ高い、イケメンエリート大富豪！ 相手にとって不足なし！ 一流テクニクも期待できそうよ。こうなりや強引に

でも一戦交えなさいよ！」

「ないないない！ セックスは契約違反だもの。違約金十萬ドルも払えないし」

「馬鹿ばかねえ。契約なんて双方の合意があれば、なんともなんのよ。男と女を前に契約なんて無意味」

ディーターを相手にロストバージン！ 想像しただけで美紅は目が眩くらんだ。あのたくましい体に包まれたら、どんな感じがするんだろう？ ディーターの舌や指が敏感びんかんなところに触れるかと思うと、美紅の体は火照ほった。

「ダメダメダメ。やばいやばい。無理無理」

「社長がダメなら、アロンって男に頼んだら？ 最初は、ああいう人に手ほどきしてもらおうといいわよ。あちらさんも相当なもんでしょ」

確かにアロンは物腰柔らかで優しい。女性の扱いにも慣れてるし、こちらきおくも気後れしない。ディーターを前にしたときのような緊張感はない。

けど、アロンは男性として見れないな。

瞬時にそう思ってしまったことが不思議だった。アロンもイケメンなのに、ときめかない。ディーターに対する、あの一気に体温が上昇する感じは一切ない。

「いやいやいや。ないから。絶対ないから。私みたいな女は、ああいうエリート達には相手にされないって」

「妄想するだけならタダじゃん。で、どうなの？ あんた、どっちがいいの？」
 「私は……やっぱ、するならディーターのほうがいいかな」
 「ちよっと、なにあんた赤くなってるの？ やだー！ 聞いている。こっちが恥はずかしー」
 「やめてよ！ 仮定の話でしょ？ それにディーターからは好きになるなって釘きを刺さ
 れてんだから」

「くだらない。そんなの無視無視。あんたもう二十二でしょ？」

「う。私だって別に好きでバージンなわけじゃないわよ」

「いい？ チャンスは体で感じるのよ。理性や論理ではなく、本能を信じるの。時がき
 たら第六感が教えてくれるから」

ステファニーは、ぐっと顔を寄せてこう言った。

「そして、今だ！ と思つたら、冷静かつ大胆だいたんに行動すること」



この場所には明らかに場違いな黒塗りのリムジンが目に入った瞬間、美紅は思わず背
 筋を伸ばした。

ここは、マンハッタン橋にほど近い、美紅のフラットがある少々治安の悪い地域。立

ち並ぶ老朽化ろうきゅうかしたビルのシャッターは下り、人気ひとけはなく静まりかえっている。街路灯に
 照らされた美紅の影だけが、ひび割れたアスファルトに伸びていた。六月も終わりだと
 いうのに珍しく涼しい夜で、美紅は微かすかに身震みぶるいした。今夜はディーターと会食をする
 約束で、美紅は迎えを待っている。

滑すべるようにリムジンがやってきて目の前で停車した。ピカピカに磨かれた車体にドレ
 スアップした美紅が映る。制服を着たドライバーが降りてきて、恭うやしくドアが開けら
 れた。

車内にタキシード姿のディーターが見え、それがあまりにスタイリッシュで、美紅は
 一瞬ひるむ。

「手を……」

言いながら視線を上げたディーターは、美紅の姿を見てしばし沈黙ちんもくした。

今夜の美紅はパーフェクトにドレスアップしていた。眼鏡めがねを外し、髪をアップにし、
 腿ももまでスリットの入った紺青こんじょうのドレスをまとっている。鎖骨さこつは完全に露出し、そこに手
 入れた巻き髪がふわりとかかっていた。ドレスがタイトで胸の谷間までくつきり出て
 いるのが、美紅は気恥きぢずかしかかった。ウエストをぎちぎちに締められてはおかげで、
 きゅっとしたくびれができています。元々色白なほうだけど、ドレスの深い青がいつもよ
 り肌の白さを引き立てている気がした。

どう？　だぶだぶの野暮^{やぼ}つたいスーツを着た玉ねぎは大変身したでしょ？　と美紅は自信満々である。

データーは言葉を失ったまま、熱っぽい眼差^{まなざ}しでこちらを見つめている。このとき、美紅はデーターの磁場^{じじょう}に引きずり込まれるような、強い引力を感じた。その刹那^{せつな}、自分がなにをここにへ来て、相手が何者かさえ忘れていた。

しばらく、美紅は不思議な磁力を感じながら、データーをぼんやり見つめていた。先に立ち直ったのはデーターだった。即座^{きやくざ}にビジネスモードの仮面^{かめん}を被り、さっと手を出し美紅をエスコートする。

「お嬢さん、お手を」

言われるがままに手を取り、美紅はリムジンに乗り込む。そこには目を見張るほどセレクトな空間が広がっていた。

うわあ〜すごい！　美紅は思わず両手で口を押さえた。お洒落^{しゃれ}なバーみたい！　こんな映画の中だけだと思ってたけど、現実にあるのね……

車内はゆったりとしたスペースで、ベージュを基調としている。革張りのロングシートは優美な曲線を描き、バーカウンターにはシャンパンやカクテルも用意されていた。

美紅が車内を見回しているうちにリムジンは音もなくアレン・ストリート^{ストリート}を北へ走り始める。

「おひさしぶりです。データー」

「やあ、美紅」

データーはどこかぼんやり美紅の唇の辺りを見つめたまま答えた。

今夜の彼は気品あるデイナージャケットを羽織^はり、シャープなナロータイを結んでいる。鍛^{きた}えられた足はスーツに包まれ、黒い革靴は光沢を放っていた。重々しくなりがちなフォーマルスーツも、タイとシャツの組み合わせて軽やかに着こなしている。まさにニューヨークのトップに君臨^{くんりん}するビジネスマンといったコーディネートだ。

美紅が足を組むと、データーの視線は深いスリットからのぞく白い太腿^{ふともも}の辺りをさまよった。

「これ、どう？　あちこち引きずり回されて、改造させられたんだけど」

データーの不躰^{ぶつぽう}な視線に少し照れながら、美紅は言った。

「いや……綺麗^{きれい}だ。むしろぶりつきたくなるというのは、このことだな」

彼が本気で言ったように思え、美紅は恥^はずかしくなって顔を伏^ふせた。

ちよつとちよつと。これぐらいでうるたえてちゃダメだって！　こんなの、プレイボーイの常套^{じょうたう}句^くなんだから。

「君がこの仕事を引き受けてくれて感謝しているよ」

データーが微^{かす}かに笑いながら言った。彼の低音は腹が立つほど耳に心地よい。

「感謝するのはこつちよ。一銭も払わず体中ピカピカにしてもらった上に、こんなすごい車に乗れるなんて。もつとも、この後なにが起こるかわかんないけど」

「なにが起こるかわかんない……いいね。僕を誘惑するとか?」

美紅は目を見開いて唾然とした。これだからモテる男は！

「あつきた。どんだけ自信家なの? 自分を誘惑しない女は、この世に存在しないか思つてそう」

「これまでの経験を踏まえて言っているだけだ」

「そういうのをイタイ奴つて言うのよ。ああ、あなたみたいな自意識過剰な人の婚約者を演じなきゃいけないなんて気が滅入るわ」

「珍しいな。大抵の女性は尻尾を振つて引き受けてくれるが」

「でしようね。あなたの富と名声にたかつてくるんでしよう。蛍光灯に群がる蛾みたいに」

データーは心外だと言わんばかりに片眉を吊り上げた。

「どうやら僕は知らない間に随分と嫌われたらしいね。君に失礼なことをしたのなら謝罪するよ、美紅。しかし、そんなに嫌な相手のフィアンセ役を、なぜ君は引き受けたんだろうか」

「ふん。引き受けた理由なんて一つに決まつてるでしょ!」

美紅は彼を睨みつけ、人差し指と親指を擦り合わせるジェスチャーをした。

「お金よ!」

「明快だな」

「当たり前でしょ。それ以外に理由があるとでも思ったの? 自惚れんのもいい加減にして」

「それでいい。前も言ったが、変な下心を持たれたら困るからな」

「悪いけど、それはこちらの台詞よ。リッチだからつて下心がないとは限らない。むしろ、歪んだ欲望を抱えてそうなもの」

データーはフツと鼻で笑うと、シートに深くもたれ、長い足を組んだ。

「笑わせてくれるな。女には不自由していない。僕は『マンハッタンで結婚したい独身男性ナンバー1』に選ばれたんだぞ」

笑わせてくれるのはどつちよ! と美紅は内心ツツコんだ。得意気に胸を張る彼は、まるで駆けつこで一等賞を取った子供のようで、ついニヤけてしまう。

どこが冷酷非道な野心家なのよ。可愛いところあるじゃない。

「不安な気持ちはわかる。僕も偽装婚約なんて初めての経験だ。だが、お互い協力すればきつとトラブルなく終わると信じている」

美紅の様子にまったく気づかずデーターは言った。美紅は込み上げる笑いをなんと

か呑み込み、こう返す。

「私だってトラブルなく終わらせたい。任務を遂行して、綺麗な体でアパートに帰りたい」

「ならば僕らは同じ思いだ。僕だって綺麗な体のままマンハッタンのオフィスに帰りたい。そのために最大の努力はするよ。だから毛を逆立てた子猫みたいに威嚇しないでくれ」

「別に威嚇なんてしてないし。……それにしても無駄に広い車ね。いつもこんな車で移動してるの?」

「いや、今夜は特別だ。少し呑むつもりだから。普段の移動は自分で運転している」

「へえ。車の免許なんて持つてるんだ?」

「当たり前だろう? 僕をなんだと思ってるんだ」

「ごめんさい。部下に運転させて後部座席でふんぞり返っているお坊ちゃまかと思つたの」

データーの片眉がびくりと動く。どうやら今の言葉は、彼のプライドに障つたらしい。

「基本的に自分のことは自分でやる。もつとも、忙しいときは他人の手を借りることもあるが」

データーは横目でジロリと美紅を睨んだ。その刺すような視線は面接のときと同じだ。

「そもそも僕が運転手を雇おうが後部座席でふんぞり返ろうが、君には関係ない。給料は払っているし、法律違反もしていないんだから」

なによムキになっちゃって、と美紅は思う。少しでも見下されたら猛反撃してくるなんて、よっぽどプライドが高いのね。でも、少し子供っぽいけれど、それが彼の魅力の一つなのかも、と美紅は分析した。

データーは軽くため息を吐き、ドアに肘をかけて頬杖をついた。窓の外には、きらびやかなビルの灯りが近づいては去ってゆく。十九時過ぎのアレン・ストリートは仕事を終えた人々が行き交い、少し渋滞していた。

美紅がシートに座り直すと、左手が彼の右手に触れた。またしても体の芯にわずかな電流が走る。小さく息を吸い込むと、どくりと心臓が跳ね上がる。触れ合った部分がやけに熱く感じ、体は硬直した。そのまま固まっていると、データーがそつと手を握ってきた。

一瞬で、車内の空気が熱を帯びてきらめいた。感覚が手だけに集中し、耳の奥で心音がうるさく鳴る。二人とも手を握っているなんておくびにも出さず、無言でそれぞれの方向を見ていた。美紅は座席の正面にあるモニターを、データーは窓の外の夜景を。

モニターは無音の古い映画を流し続けている。
 静まれ、静まれ、私の心臓！ 美紅は懸命に祈った。こんなんでグラついてちゃダメ！ 相手はプレイボーイなんだから。こんなの、ただの挨拶よ。ドキドキするほどのもんじゃないって！

データーはさらに図々しく指を絡めてくる。美紅はウブなティーンエイジャーに逆戻りした気分、自分でも戸惑うほどうろたえていた。横目でチラリとデーターを見ると、抑えめなブルーの照明に眉目秀麗な顔が照らされている。

骨格も肌も瞳も、本当に美しい。そのどこか物憂げな表情がひどく色づぼくて、美紅の鼓動は乱れた。

気づくとイースト・ビレッジに着いていた。データーは何事もなかったように車を降り、美紅の手を取ってエスコートする。美紅はアスファルトに着地すると、ふらふらとよろめいた。

「おい。歩き方がペンギンみたいだぞ」

データーが意地悪くからかう。それを見て、美紅はやつといつもの調子を取り戻した。

「うるさいわね！ こんなに高いヒールなんて履いたことないのよっ」

「本番までにはどうにかしてくれよ。それ」

データーは偉そうに言ってナロータイを直し、髪を撫で上げた。

「わ、わかってるってば！」

目の前には見上げるほど高い大聖堂のような建物がそびえ立っている。支柱から壁まで、すべてが黒い大理石造り。ガラス張りの入り口のドアからは店内の温かい光が漏れ出ている。

『Reflections Of Living』——ニューヨークなら誰もが知る、フレンチをベースとした多国籍料理が楽しめるハイクラス・ダイニングだ。世界中のアーティストやセレブたちが集まる社交の場でもある。

ドラマや映画でしか見たことのない世界に、美紅はすっかり怖気づいてしまった。

「……どうした？」

呆然としている美紅を見かねて、データーが言う。美紅は気合いを入れ直し、ポーカーフェイスを作った。

「な、なんでもないわ。さあ、行きましょう」

美紅はデーターの腕にぶら下がるようにして数歩歩く。ヒールが高過ぎてサーカスの曲芸レベルだ。あの、高い靴を履いて歩くピエロみたいな……

「……ちよっと。なにニヤニヤしてるのよ」

美紅が睨み上げると、データーはクスクス笑いながらこう言った。

「いや。楽しい夜になりそうだと思ってるね」



ディーター・アウグスト・キタヤマは目の前の光景に驚愕した。

恐るべきスピードと一分の無駄もない動きで、次々と皿の上の料理が平らげられていく。まるで完璧に計算しつくされた工場の生産ラインのようだ。下品ではない。テーブルマナーは完璧だ。目の前の女は料理を味わうことだけに、とんでもなく集中している。帆立貝だのテリースだのが音も立てずに桃色の唇の間に吸い込まれていく。時折のぞく小さな歯が妙に色っぽい。

「おいしーい！」

美紅が満足げに喉を鳴らす。彼女が心から幸福感に包まれているのが伝わってくる。

自然と、ディーターの口の中に唾が溜まる。そんなに美味いのか？

「……そんなにじーっと凝視されると食べづらいんだけど？ 私のこと監視してるの？」

「ああ、すまない。悪気はない」

つい芸術的な食べっぷりに目が離せなくて、という台詞は呑み込んだ。これでも紳士としての礼儀は心得ている。

店内は天井まで吹き抜けで、空間を贅沢に使っている。内装はマンハッタンにふさわしくアール・デコ調だ。フロア中央には、天井まで届く榆の木の子に、薄紫の芍薬と純白の蘭を散らした巨大なフラワーオブジェがあり、いいアクセントになっていた。

ここはそんな店内を一望できる、中層階のVIPルームである。当然、特別な人問しか入ることを許されない。下層フロアとは特殊なガラスで仕切られ、個室内は華美な装飾はなく、より落ち着いた雰囲気。壁には、かの有名な後期印象派の絵画が掛かっている。ドアの傍に支配人が控えており、プライベートでくつろげる空間だ。

二人は真っ白なクロススの掛けられたテーブルに向かい合って座っていた。突き出しのアミューズメントが運ばれてきて以来、美紅は一度もディーターと目を合わせていない。「食べないの？」

美紅は、初めてディーターの存在に気づいたかのように言う。

「いや……」

言われて初めてディーターはフォークとナイフを動かした。冷前菜はブルーニユ産オマール海老だ。オマール・ブルーと呼ばれる青みがあったもので最高峰のブランドである。それにスライスしたキュウリとキャビアが添えられ、海老味噌ソースと絡めて食べる。……うん。食べ慣れた、いつもの味だ。

「こんなに美味しいもの食べたの、初めてー！」

美紅はご機嫌で今にも踊りだしそうだ。美味しそうに咀嚼して呑み込んでから、こう打ち明けた。

「実はいつもベイクトビーンズとトーストばかりなの」

「それはよかった」

「あなたは、あんまり美味しくなさそうね？」

「この料理は食べ慣れているから、感動がないだけだ」

「ええっ！ 嘘」

美紅は気の毒そうに眉尻を下げた。

「こんなに美味しいのに感動できないなんて、なんか可哀想」

「まったくだな」

ここの料理を食べ慣れたせいで感動できないディーターと、食べたことがない故に感動できる彼女。真に可哀想なのはどちらか。一つ言えることは、彼女のほうが自分より数倍幸せそうだったことだ。少なくとも、今この瞬間は。

「ああ、ほんとに美味しい！ きっと今夜のことは一生忘れない」

花が咲いたような彼女の笑顔に、ディーターも釣られて微笑む。彼女はキラキラしている。彼女より美人でスタイルのいい女はたくさん見てきた。だが、こんな風に弾けるほど輝いている女は見たことがない。

「ステフにも食べさせてあげたかったなあ。これってテイクアウトできないのかしら」

「ステフ？」

「あ、ハイスクール時代からの親友なの。不動産会社で事務をやりながら、ロマンス小説家を目指しているのよ」

表情がころころ変わるのを見ているのは楽しい。彼女はとても幸せそうで、その幸せを誰かに分けたくてしようがないという顔をしている。今の彼女にその幸福を自分が与えたのだと思うと、ディーターは誇らしい気持ちになった。

「なんでも好きなものを頼むといい。ワインでもデザートでもなんでも」

「もちろん、そうさせてもらいます。これも報酬の一部だもんね」

美紅は楽しそうにペロリと舌を出した。ディーターは自然と顔がほころぶのを止められない。まったく、まるで子供だな。不思議とリラックスしている自分に気づく。

これまでの女たちはどうだった？ 皆、体型を気にして小鳥みたいに皿をつつくだけ。視線でディーターの体を舐めまわし、ベッドに行くことしか考えないハイエナだ。こちらの関心を引こうと大して興味もない話題を浅い知識で振ってきた。繰り返される退屈な笑顔と退屈な会話。

—— 僕を喜ばせる方法は実にシンプルなのに。心からこの場を楽しんでくれさえすればいい。美紅みたいに。そうすれば、その感情が僕に伝染し、こんなに楽しい気分

なれるのに。

「あの、現地に飛ぶ前にいろいろ打ち合わせしておいたほうがよくない？ これから私たちはフィアンセを演じるわけだから」

食事が一段落した美紅はアイスティーのような瞳でじっと見つめてくる。

「やる気になってくれてうれしいね」

「私は最初からやる気満々よ。ベストを尽くすつもり。充分な報酬も頂いてるし、愛する人との仲を引き裂かれそうあなたに従妹のアレクシアを救うためですもの。同じ女性として不憫に思うし」

そうだった。本来の目的をすっかり忘れていた。

「ああ、そうだな。僕の家族にいろいろ質問されるかもしれないから」

「そうよね。二人の出会いはどういうことにする？」

「どこかのパーティーで出会ったことでいいんじゃないか？」

「もしもし？ 私みたいな職なし家なしの貧乏女優がどんなパーティーに出席するって？ 世の中の女性が皆パーティーに出ていると思ったら大間違いよ。私なんてハイスクールの卒業パーティーが最初で最後だし」

「ふむ。それもそうか。君にいい考えはある？」

「私の日常生活で、あなたみたいな億万長者と出会うチャンスってあるかなあ？」

美紅はしばし真剣に考えてから、こう提案した。

「車の事故ってのはどう？ 私の運転が下手であなたの車にぶつかったのが出会いのきっかけ」

「三流恋愛小説の筋書きだな。しかもリアルにやられたことがあるよ。金目当ての女にね」

ディーターは当時を思い出し、少々うんざりした気分になる。

「それに君、車の免許は持ってるの？」

「……持ってません」

「すぐバレる嘘はダメだな」

「じゃ、私が講師を務めるダンススクールにあなたが通っている、ってのはどう？」

「悪いがダンスは幼少の頃から英才教育を受けている。スクールに通っているなんて言ったら、僕の親族は変に思うだろうな」

「うーん、そうかあ。私がバイトしてたコーヒESHOPPにあなたがお客として来た、とかは？」

「いや、僕はめつたにコーヒをを外で飲まない。オフィスにはコーヒメーカーがあるからな。いい豆を使ってるよ」

「これもダメかあ。なら、親友の元恋人だったっていう設定は？」

「なるほど。親友から君を寝取ったと。しかし、親友は誰だと突っ込まれたらどうする？ その親友と君はどうやって出会ったんだろう？」

「うーん、細かい裏設定が必要だし、すぐにバレるか」

「プロットを練るのもひと苦労だな」

「実は私は記憶喪失で、あなたは過去に私に騙されて心に深い傷を負った……」

美紅は声を落とし、深刻な表情をした。

「——あれから二年、時はきた。今こそあのアバズレに目にモノみせてやる！ 記憶を失った私に忍び寄る、暗い影。あなたは私に復讐しようと思む億万長者ってのは？」

データーは声を上げて笑った。ひさしぶりに聞いた自分の笑い声に、自分で驚く。いつの間にか僕はこの会話を楽しんでいる、とデーターは思った。

「悪くないね。じゃあ僕は拳銃と毒薬を常にかけておかないとな」

「そうね。せっかくだから口髭の生えた名探偵でも雇っておいてよ」

「いいだろう。盗まれた宝石と犯人の執事も用意しないとな」

「ちよっと、真面目にやってよ！」

言いながら美紅も笑いを堪えている。

「君が先に言い出したんだろう？」

——なぜ、僕はこんなにはしゃいだ気分になるんだろう？ データーは話しながら

冷静に考察した。美紅が魅力的だから？ それだけじゃない。美女は飽きるほど見てきた。誘惑したり誘惑されたり、場数もかなり踏んでいる。

きつと自分には美紅のようなポジションの女性がいらないからだ。利害関係が一切なく、色恋沙汰ともほど遠く、仕事にも関係なく、気を遣ったり遣われたりすることのない関係。友人でも恋人でもセフレでもない。普通に生きていたら目を合わせることもない女性。遠い異国の地で現実を忘れ、たまたま同じ列車に乗り合わせたような。きつと彼女にとつてのデーターも同じなんだろう。

「で、どうするんだ？ 僕らの出会いは」

「はあーあ。ほんとに難しいなあ」

美紅が頭を悩ませる様子は可愛らしい。

美紅はさんざん首を捻ってから、こう言った。

「じゃあ、あなたの会社の採用面接を受けたのが出会いのきっかけ、とかは？」

「それなら嘘は吐いてないな。まさに現況どおりだ。が、悪いが僕は入社希望者を口説く人間じゃない」

「例外を作ってください。じゃないと、私とあなたは永遠に出会えません」

「……いいだろう。では、君が我が社の求人に応募してきて、面接で僕は君の魅力にノックアウトされた」と

「うーん。ちょっと無理があるかなあ？ 私なんかじゃ明らかに力不足な気が」
 デイターは美紅のくつきりした胸の谷間を一瞥した。まったく、なんでそんなに肌触りがよさそうなんだ。……そんな風に考えてしまうのは、この忌々しい不眠症のせい
 いか。

「問題ない。充分魅力的だ」

言ってから自分の言葉に驚く。——魅力的だって？ あの完全に圏外だった純情玉ねぎが？ まったく、今夜の僕はどうかしてるな。だが、嘘は吐いていない。確かに彼女は魅力的に変身した。とても劇的に。その努力は認めてやるべきだ。

デイターは小さく咳払いしてから、こう釘を刺した。

「ところで、ときどき敬語になるのをやめてくれないか。ファイアンセ同士、敬語はなしだ」

「わ、わかった」

「君に関する情報はひととおり頭に入っている。他に質問はあるか？」

「ちょっと気になってただけど、私以外にも応募者がいたわけよね？」

「ああ。表向きは秘書の募集だったからな」

「なぜ、私が選ばれたのかしら？ 自分で言うのもあれだけど、大した学歴もないし、自慢できるキャリアもないと思うんだけど」

「君を強く推薦したのはアロンなんだ。この件はアロンに一任している。だから、僕と面接した時点でほぼ君に決まっていたんだよ。最終面接は僕との顔合わせ、いわばオマケみたいなものだ。よほどのことがない限り、君を落とすつもりはなかったよ」
 「ふーん。じゃあ、あなたに採用されたというより、アロンが私を採用したってことね」

「ま、そういうことだ。奴は僕よりも人を見る目があるからね。常に僕の会社とグループ全体のことを考えてくれている」

だが、アロンはどういうつもりで彼女を採用したんだ？ デイターはちらりと思う。ぶかぶかスーツに玉ねぎヘアがダイヤの原石と見抜いたからか？ だが、今回のミッションに美人でセクシーである必要はあるか？ どうも腑に落ちないな。

「なんだか腑に落ちない。アロンがなぜ、私を選んだのか」

美紅は考えながら言った。

「君はなかなか鋭いな」

「あなたって恋人はいないの？」

「いるっちゃいるし、いないつちやいないな」

「じゃあ、その人に頼めばよかったんじゃない？」

「婚約者の芝居を？ 勘弁してくれ。そんなこと頼んだら、勘違いして芝居を真実にし

ようするだろう。僕は結婚する気はさらさらないからね」

面倒な話題だ、とデーターは眉をひそめた。これだから女は厄介だ。口を開けると二言目には愛だの結婚だのと騒ぎ出す。

データーはワイングラスを唇をつけた。ほのかにスパイスの効いたバランスよい果実味。薔薇やスミレの得も言われぬ芳香が口いっぱい広がる。ブルゴーニュの特級畑で栽培し醸造された赤ワインだ。これ以上の代物はニューヨーク中探してもないだろう。「結婚しないって、一生?」

ワイングラスを傾けるデーターをじっと見つめ、美紅が言った。美紅の皿はすでに空になっている。給仕長がやってきて恭しく皿を下げた。

「そう。生涯独身だ。家庭を持つ気は一切ない」

データーは断言し、芸術的に盛られた牛肉のローストにナイフを入れた。マンハッタンで最も寝かせたエイジングビーフはとろけるほど柔らかく、刃先が抵抗なく埋まっ

てゆく。「今はそんなこと言っても、愛する人が見つければ気が変わるんじゃない」

「無理だろうな。愛する人なんて現れないから」

「……人を愛したことがないの?」

君には関係ない、と突っぱねようとして思い直す。美紅もプライベートを捧げてこの

立ち読みサンプル はここまで

茶番に協力してくれている。自分自身のことをなにも話さないのはフェアじゃない。それに別に隠すこともない。

「もちろん、愛したことはあるよ。僕が命を捧げ、生涯をともにするならこの人しかいないと思ってた人がいる」

「ごめんさい。もしかしてその人、亡くなったの?」

「いや。生きてるよ。ピンピンしてる。親父の今の奥さんだよ。実の父に寝取られた」

美紅がはっと息を呑んだ。データーは冷静にそれを受け止めた。そりゃ誰でも引くだろうな。

「勘違いしないでくれ。僕は父も彼女も恨んでいない。今はなんとも思っていないし、家族としてうまくやっている。もちろん、当時は親父を憎んだよ。彼女も殺してやろうかと思った。でも、本当に仕方ないんだ。親父はそういう性格なんだよ。他人が持っているものを、どうしても欲しくなる。自分で止められないんだ。彼女も同じだ。金がどうしても欲しくなる。自分でコントロールできない。それが二人のありのままの姿なんだ。彼女の本性を見抜けなかった僕が悪い」

「そのせいで愛を信じられなくなったの?」

「いや、そんな悲愴なもんじゃない。どう言えばいいのか……愛も信じてるけど、愛だけじゃないんだ。愛こそすべて、というのは極端すぎる。愛がすべてという考えと、